

# 活動センターだより

2011年度 第1号 (8月25日発行)  
2010年11月～2011年5月プログラム報告

## 2010年度 プログラム

2010年度 修学院フォーラム「福祉と聖書のこころ」 第4回

「いのちの祝宴—1粒の麦、もし死なば」 (マルコ4:1-8)

2010年11月13日 (土) 13:30～17:00

講師: 岡山 孝太郎 (日本キリスト教社会福祉学会副会長)



岡山孝太郎氏を講師に招いて計画された《修学院フォーラム:福祉と聖書のこころ》の最終回(第4回)。講師は、本シリーズ4回の聖書講義を通して、「福音と

半(1～6章)もまた関係が途絶え、中断される場所としての海辺(ガリラヤ湖畔)の物語として展開しているのは興味深い。講師は、人間の営みのなかに蒔かれた種を神の言葉(イエス・キリスト)として福音にと結実する過程を、一粒の麦(12:24)と関係させながら丁寧に読み解かれた。

ティーブレイクをはさんで、参加者は、それぞれの経験のなかに蒔かれた種(福音の受容)について、報告し合い互いに分かち合うことができた。話題は、福祉現場、喪失体験、家族の問題などに及んだが、講師の適切な導きによって、共有された問題を聖書的視点から再考しながら「はなしあい」の時間をもつことができた。

4回の講師のお働きに感謝をして、本シリーズを終了した。

(中村 信博 同志社女子大学学芸学部教授)

福祉のかかわり」は「生と死のかかわり」を内包し、ともに区別され得ても分離し得ない関係にあることが基本理解となることを強調された。

そのうえで、死を必然とする人間を支援する福祉もまた、「生」のみに傾注することなく、「死」の現実と対峙せざるを得ないと訴えられた。死が関係の喪失を本質とするならば、マルコ福音書の前

### 《参加者アンケートから》

- ・与えられた生を、人間としていかに生きるか、かねてから聖書を書き、伝えてきた先達の偉大さを感じていました。岡山先生の解き明かしを通して、深い読みを学ばせていただきました。福祉は、生きている人間すべての問題と理解します。
- ・“死”の側から“生のありよう”を深く考えさせられました。いつも、聖書からの深いすばらしいメッセージを説きあかして下さって、ありがとうございます。
- ・「人の弱さとは美しいもの、尊いもの」という認識が、福祉施設現場等において共有されることが今後の課題となるのではと思われました。

2010年度 関西セミナーハウス

## 「もみじまつり」

2010年11月23日 (火・祝) 9:00～16:30

(茶席) 北風宗照、藤井宗恵、裏千家一宇会、  
(邦楽席) 千葉由紀子、(コンサート) 神谷 徹

11月23日(火・祝)恒例のもみじまつりが開催されました。前日は雨、しかし当日は日本晴れの晴天になったのであります。やはり禿げ男の力か、いや晴れ男でした。今年は10月の末まで暑い日が続き、11月に入って突然例年以上の寒波が襲ってきたので、紅葉は過去30年の内今年ほど綺麗な紅葉はないといわれるほどの美しい紅葉となりました。当日は、568人のご来客があり、セミナーハウスの関係者46人を加えると約610名でもみじまつりを楽しむことが出来ました。



お茶の北風宗照先生、藤井宗恵先生、裏千家一宇会のみなさまのご奉仕による恒例のお茶席、お琴の千葉由紀子先生とお弟子さんの演奏、リコーダー演奏者の神谷 徹先生のストローコンサート、それぞれ素敵なお奉仕をしてくださり、来会者は皆さん笑顔がいっぱいのもみじまつりでした。特に、神谷徹先生のストローコンサートは子供たちも大喜びで、大人の中にも涙を流して喜んでおられる人がおられるほど、感動的でした。ジュースを飲む時に使っているストローが先生の手には掛かると楽器になって、しかもシャボン玉が出てくるような仕掛けのある楽器になるのですから驚きと感動を与えました。その場でニンジン

に細工をして楽器にして演奏された時には、感動の拍手が起こりました。世の中には色々な音楽家がおられものですね。



今年の美術部門は、セミナーハウス所蔵のアジア美術作品の展示をいたしました。故竹中正夫先生が収集してくださった作品やアジアキリスト教美術協会からお預かりしている作品などを展示しました。職員の中井博義さんが裏の竹を使って絵を掛ける構築物をアゴラホールの真ん中に作ってくださり、それがまた素晴らしく、絵よりも感動したと言う人もおられるほどでした。セミナーハウスは才能に恵まれた技能者が多いのです。

残念なことは、能が同志社大学の学生も京

都大学の学生も都合がつかず、計画から外さなければならなかったことです。今ひとつ、お琴の千葉先生から「今年で最後にして欲しい」とのお申し出を受

けたことでした。先生がお年を召されたからということでしたが、長年ご奉仕して下さったことに感謝すると共に、残念な気持ちでした。これらのことを踏まえて、運営委員会で次年度からのもみじまつりを再検討する委員会を作らなければならないと考えていましたが、森口前館長の妹君がお琴の先生であられるので「如何でしょうか」と協力を打診しましたところ、快く引き受けて下さいまして、来年以降も伝統のスタイルを



守ることが出来ることになりました。誠にセミナーハウスは人に恵まれているところでございます。

昔職員であられた方々が、前日から泊りがけでかけ参じてくださり、セミナーハウスの同窓会が行われているようでもありました。セミナーハウスのもみじまつりということですから、運営委員も経営委員も旧職員も関係者みんなが集まって準備から片づけまでのお祭りになると素敵だナードと思いました。セミナーハウスの財産は人ですからね。年々参加者が増えてゆくもみじまつりになりますように。

(春名 康範 関西セミナーハウス活動センター所長)

2010年度 修学院フォーラム「いのちを考える」 第3回

### 「ホスピスケアー死と向き合う人に寄り添う」

2010年12月11日(土) 13:30～17:30

講師：田村 恵子(淀川キリスト教病院ホスピス主任看護課長 がん看護専門看護師)



田村さんは、1989年から淀川キリスト教病院のホスピスで20年以上に亘り、がん看護専門看護師として勤めてこられ、その様子は2008年NHKテレビの「プロフェッショナル仕事の流儀」でも紹介された。田村さんは、その長い経験とその深い洞察に基づいて、

ホスピスケアの特色を次のように紹介された。

がんの進行のどの段階においても、患者とその家族が出来る限り良い生活の質を実現するために、身体的苦痛のみならず精神的苦痛をも和らげる全人的緩和ケアが求められるが、その中でホスピスケアは、

自分の死に直面するという最も難しい人生の段階において患者を保護し、安楽を提供する特別なケアを意味する。人は身近に死を感じるようになると、最も大切なことをはじめなくてはという思いになるし、真実なもの、価値あるものを求めるようになる。また不条理な人生に深い怒りをもち、過ぎ去った多くのことを後悔し、深刻な虚無感に捕らわれる。ここにスピリチュアルペインの本質がある。この問いに向き合い、意味を見出し、意味を作り出し、希望を紡ぐ手伝いをするのが、スピリチュアルケアである。患者は自らの命の限りに向き合い、たくましさとしなやかさを増していく。痛みから解放されたとき、患者は身心の自由を取り戻し、本来のその人の在りように立つことができる。ホスピスの目指すところは、「あなたは、あなたのみまでたいせつです。あなたの人生の最後の瞬間までたいせつな人です。ですから私たちは

あなたが安らかに死を迎えられるだけでなく、最後まで生きられるように全力を尽くします」とのメッセージを送ることである。

33名もの多くの人々が参加され、自己紹介の時、それぞれ自分の抱えている問題を述べた。それに対し、田村さんは、それらすべてを書きとめ、後のはなしあいの時間にとどの人にも配慮の行き届いた応答をされた。参加者一同田村さんと一緒に思いを深めることのできたひと時であった。

(小久保 正 中部大学生命健康科学部教授)

《参加者アンケートから》

- ・ホスピスについて、具体的に理解できた。
- ・死について考えることができました。生の声が聞けたことも良かったです。
- ・私の中で、「死」について、家族とも一緒に考え伝えて行きたいです。
- ・残った者へのケアについても言及していただき、嬉しかった。
- ・緩和ケアの内容が良く理解出来て、死と向き合うことはそういう病棟内だけではなく、一般的な生活の場面でも必要ということもよくわかりました。

2010年度 開発教育セミナー 第6回

### 「預けたお金はどこへ行く～あなたのお金が地域を変える、世界を変える～」

2010年12月11日(土)16:00～12日(日)12:00

講師：金丸 美美代(ソーシャル・ファイナンス関西代表)  
小吹 岳志(オイコクレジット・ジャパン事務局長)

今回のセミナーでは、オイコクレジット・ジャパン事務局長の小吹岳志さんとソーシャルファイナンス関西代表の金丸美美代さんを迎え、社会的金融(ソーシャルファイナンス)について学びました。

1日目の最初は「地域金融ゲーム」という、ろうきんが開発したシミュレーションゲームを体験しました。このゲームでは、参加者は主婦(夫)や退職者、農家や地元の工務店・企業などの役割になりきり、銀行でお金を借りなくては地域全体の経済活動が活発にならないということを体験するものでした。その疑似体験を通して、地域銀行の「顔と顔をつなぐコーディネートをしながら、お金を回す役割」を実感できました。



次にソーシャルファイナンスとは何かについての解説がありました。マイクロクレジットとは、貧困などの問題に直面する人々に対する少額の無担保融資、マイクロファイナンスとは、低所得者の人々やその人たちのビジネスに対する貸付、預貯金、送金、保険等の金融サービス。そしてソーシャルファイナンスとは経済的リターンと社会的リターンを同時に追究する組織によって提供される金融をいうのだそうです。つまり既存のしくみでは解決や支援ができない企業や団体を支援する金融のしくみをソーシャルファイナンスといいます。例えば、アトピーの子どもに食べさせる食べ物を開発する企業に対して支援するというのもその一つです。



このように1日目には体験的に学んだ金融のしくみを、ソーシャルファイナンスという視点で見つめ直す時間を持つことができました。

2日目には、「今あなたに100万円という自由に使えるお金があるとして、そのお金をどこにどこに使いますか？」というテーマで話し合いました。環境や社会に配慮した融資をする金融機関や、環境や福祉のための活動をしている団体に融資している小規模の非営利バンクなどに対して、自分ならいくら出資するかというこ



とについて具体的に考えました。

定期的に決まった額のお給料をもらい、借りたお金を運用するということが縁遠い私たちにとって、お金を借りるということが経済全体を動かすことにつながっているということを実感するのは少々難しかったようです。でも、だからこそ、お金の借り方・つかい方をしっかり考えなければならぬということを感じることができ、有意義な時間を過ごすことができました。

(佐藤 友紀 大阪府かわち野高等学校教諭)

《参加者アンケートから》

- ・ゲームでは、最初のうちぜんぜん動けなかったのに、一旦町に金が回りだすと、全体に活気ができて、どんどん動き出すのが体験できた。面白かった。ただ、ゲームの理解がやや難しい。
- ・預けているお金の行く先を今まで考えたことがなかったですが、考えるきっかけになりました。
- ・お金のことにはうといのですが、寄付とは違う形の(国際)協力が見えてきました。

2010年度 神学生交流会 第2回

「現代日本におけるキリスト者の可能性」

2011年1月8日(土) 13:30～17:00

講師：土肥 真司(永運院住職)

お寺の内側から見た実情や苦労話を含めて、興味深い話をしていただいた。これから教会で仕事をするであろう神学生にとって大いに参考になる話であったと思われる。特にわたしは、教会がお寺から学ばなければならない点として、檀家に対する働きかけである。キリスト教会にも日ごろは礼拝に来ない会員、親が信徒で子どもは教会に来ていないケース、会員であった親が死んで永眠者追悼祈祷のときしか来ない家族、そういう方々に対して丁寧な関わりを持たなければせつかくの繋がりを切ってしまうことになり教会としては宣教上損失である。

お寺も教会がやってきた活動を取り入

れて、仏教界の中では新鮮な空気を取り入れていると言われている。相互に、工夫や失敗を交換し合って、人々の心のケアをしていく宗教者になりたいと思われせられた。次年度の神学生交流会についても話し合うことが出来た。

参加者の一人の神学生が故郷から野菜を山ほど背負って上洛してこられ、一人の職員が裏山で捕れた猪の肉を沢山提供されたので、思いがけない獅子鍋パーティーを閉会后に開くことが出来た。

「主の山に備えあり」である。心も体も温かくなり、胃袋も満たされた会となった。感謝。

(春名 康範)

2010年度 お茶とキリスト教研究会 第3回

「禁制となったキリスト教はどんな弾圧を受け、どのように信仰を守っていったのか。一京のキリシタン史跡に思いを巡らせて」

2011年2月11日(金) 13:30～17:00

講師：杉野 榮(日本バプテスト連盟京都洛西教会牧師)

第1部では、ルカによる福音書における、捨てるべき命と拾うべき命、失っても失われない命について黙想し、千利休が切腹を命じられてもこだわったこと何だったのかということから、命とは何かということを中心に瞑想し、話し合った。

第2部では、8人ずつ茶室に出かけたが、残りの人は引き続き話し合いをした。そういう意味では、今回はずいぶん話し合う時間をとることが出来た。

第3部では、杉野先生からキリシタンについて話を伺った。長崎で死んだ26聖人は、長崎の人たちであると思っていたが京都の人たちであったと知って驚いた経験から京におけるキリシタンの研究を始めたこと。ザビエルが京都に

いたのは立った11日間であったが、彼の報告を聞いて沢山の宣教師が京都に来て、聖堂と病院を建てたこと。秀吉が土地を捧げて支援したこと。しかし、気が変わった秀吉によってそこで働いていた医師や看護婦、走り使いをしていた少年までが逮捕され、耳を削がれて長崎まで連行されたこと。その後、京都には隠れキリシタンというものはなくなったこと。どこへ行ったのか興味をそそられることを話された。茶室とキリシタン灯籠の組み合わせを考えると、さらに興味がそそられることを話された。利休とキリスト教との出会いがあったことは想像で



きるが、お茶の確立にキリスト教の影響があったと言うことはキリスト教側の高慢であること。土着化ではなく実生化として人々の工夫を読み取らなければならないことを話された。隠れキリシタンが用いた「魔鏡」が光を当てると壁に十字架に付けられた姿を映し出す仕掛けがされていることを実演してくださり、昔の人々の工夫に感動することが出来た。

(春名 康範)

《参加者アンケートから》

- ・杉野先生の話が体験されたこと等話され、とても良かった。
- ・個人の証とレキシのお話との調和。
- ・利休の人間像が少しずつ理解でき、もっと知りたいと思いました。又、お茶に対してもっと知りたいと思いました。今日は、春名先生、また、杉野先生の話もほんとうに心にひびき、何度か感動をおぼえました。
- ・自然と茶室での久しぶりの経験たのしく、うれしく、相見呵々笑の軸の意味通りのお席ありがとうございました。
- ・話の内容の深さに多く教えられました。もっとおききたいと思いました。

2010年度 修学院フォーラム「いのちを考える」 第4回  
「認知症の理解—その治療、看護、介護—」

2011年2月26日（土） 13:30～17:30

講師：中島 健二（京都府立医科大学名誉教授）

認知症を病む人が急速に増え、多くの人が不安を覚えている。今回のプログラムは、認知症およびそれを病む人への理解を深め、認知症を病む人と共に生きるには、

何が大切かを考えようとして企画された。

講師は、京都府立医科大学神経内科・老年内科教授として長年この問題と向かい合っており、「家族のための＜認知症＞入門」（PHP新書）などの著書もあるこの分野の専門家の第一人者である。参加者は、高齢の方々、認知症の人を介護している人、牧師、主婦、学生まで34名の多数におよび、この問題への関心の大きさをうかがわせた。

講師はまず、日本で今日認知症を病む人は、症状の軽い人まで含めて320万人に及び、2040年にはそれが600万人にも達するだろうと予測されると紹介した。しかもこの疾病は、記憶障害の他、判断力低下、抽象的思考障害、高次脳機能障害に加えて、幻覚、妄想、不穏、興奮、自発性低下、異常行動なども併発することがあるので、家族の負担が大きく、その社会的影響は伝染病に匹敵するほど大きい。しかもこの疾病は

伝染病と異なり、その原因が未だ明らかでなく、正確な診断を行うことが容易でなく、この疾病の進行を遅らせる薬はかろうじて開発されているが、これを予防する薬も、治療する薬も未だ開発されていない。従って、その薬剤による治療は、周辺症状を抑えるに留まり、認知症そのものへの対応は、薬を用いない介護が大変重要な意味を持つ。ただし増え続ける要介護老人の介護はもはやその家族だけでは対応できなくなっているため、家族と既存の特別養護老人ホームの中間施設としての介護老人保健施設の役割が大きい。このような態勢に対して私達には何ができるかが大きな課題である。京都の仏教界では、これに対する具体的取り組みが始まろうとしている。自分もNPO法人「京都の医療・福祉プロジェクト」を立ち上げ、高齢者の自立支援の方法を探ろうとしている。キリスト教界は、この問題に対し何をなすべきか、何ができるかを真剣に考えて頂きたい、と提言された。

この講演に続くはなしあいでは、多くの参加者が、それぞれ実際に直面している問題を質問として問いかけ、講師はそのいずれにも丁寧に答えられた。プログラムの後で出されたアンケートでは、多くの疑問が解決した、もっと時間が欲しかった、またこういう機会を持って欲しいという意見が多く見られた。しかし、講師が最後に投げかけた、キリスト教界は何ができるかを一緒に考えて欲しいという問いかけは、次回に宿題のまま残された。（小久保 正）

《参加者アンケートから》

- ・学術的に系統だてて説明があり、その後、例が示された点がよかった。
- ・質問に対して、適確な解答。・認知症のこと、高齢化社会のことを改めて考えることができたこと。
- ・認知症をかかえる患者を一人の人として向き合われる先生のお人柄にふれ、感銘を受けました。
- ・宿題をいただきました。キリスト教界は、何をしてきたか。何をなすべきか。

## 2011年度 プログラム

2011年度 お茶のこころと宗教のこころ 第1回

### 「最後の晚餐」と「茶道」をめぐって —お菓子とお茶とパンとブドウ酒—

2011年4月4日（月） 13:30～17:00

講師：春名 康範（日本基督教団天満教会牧師）

第1部の黙想会では、イエスの過ぎ越しの食事を伝える「食事の席について」がアナケイメノウ（上に横になって、あるいは上から下に横になって）で少し前のナルドの香油のところでは、カタケイメノウ（下に横になって、あるいは下から上に横になって）となっていることの意味を黙想した。その結果、過ぎ越しの食事は横になって食べたリラックスに意味があることなどが共通認識された。さらに第2部では解放の食事と利休の平等の茶会に共通点

があり、パン（種無しパン＝マツター）とブドウ酒の組み合わせと、干菓子と抹茶の組み合わせも簡素化された中に命を共に喜ぶ解放の場が演出されているという共通点が見られる。茶道は、利休が美しく精神化して整えたが、背景に権力との戦い、自分の中の世俗主義との戦い、愛の実践というテーマが息づいて、やはりキリシタンとの出会いが利休の茶道を深化させたと考えられるという共通理解に到達した。

（春名 康範  
日本基督教団天満  
教会牧師）



《参加者アンケートから》

- ・歴史の中で、とらえた講義で、興味深く、もっとしっかりBibleを読みたくまりました。
- ・最後の晚餐と聖餐式の根拠に興味があり、参加させていただきました。大変新しいことに教えられました。利休の茶道の作法のお話は良かった。お茶席では、癒される思いでした。
- ・人をいつも話に引き入れていくやり方もすばらしかった。

2011年度 開発教育セミナー 第1回

### 「開発教育入門セミナー」

Think Globally, Act Locally ～「足もと」と「世界」をつなぐ～

2011年5月8日（日） 10:00～16:30

講師：荒川 共生（マイチケット）、大嶋 奈津子（同志社国際中学・高等学校）  
金山 顕子（京都府立桃山高等学校）、佐藤 友紀（大阪府立かわち野高等学校）  
友前 尚子（南丹市立園部第二小学校）、丸山まり子（奈良県平群町立平群北小学校）

【知りたい、伝えたい、始めたい 私たちがここでできること】をテーマに、京都府国際センター、京都市国際交流協会、JICA大阪と関西セミナーハウス開発教育研究会の4者の共催で今年も開発教育入門セミナーを行い、78名の参加がありました。



最初の全体会では、開発教育の目的や、参加型で学ぶことの意味を全員参加型で確認し、行動へつなげるためにも、今日の学びを誰かに伝えることから始めましょう、というメッセージを送りました。



続いて、午前2つ、午後2つの分科会を実施し、研究会からは基本的なアクティビティをいろいろ体験できる「開発教育"はじめの一步!」、 「地球の食卓Ⅰ～食からみえる世界～」 「地球の食卓Ⅱ～遠くからくる食



べものと私たちの未来～」の3つを提供しました。

参加者アンケートには、「楽しみながら導入、そして深い内容まで考える構成に感動した」「“伝え方”について、これ程多くの工夫や種類があるのかと、アクティビティを通して知ることができた」「授業で実践したいと思う内容だった」などの感想が寄せられ、参加度・満足度ともに高いセミナーになりました。この入門セミナーをきっかけに、さらに深く学びあう開発教育の場に、多くの人に参加していただければと願います。

(佐藤友紀 大阪府立かわち野高等学校教諭)

《参加者アンケートから》

- ・知っていた通りの開発教育が、“これからも知りたい” “もっと工夫したい” というものになりました。体験することの重要性を身をもって感じました。
- ・授業で実践したいと思う内容でした。楽しみながら導入、そして深い内容まで考える構成に感動しました。
- ・“伝え方”について、これ程多くの工夫や種類があるのかと、アクティビティを通して知ることができた。
- ・色々と意見を出し、また聞くことができた。
- ・普段、同じ年代の人と話すことが多いので、幅広い年代の人と、こういう問題をディスカッションできたのは、本当に面白かった。
- ・今後の活動の参考になりました。身近なことから、できることから始めたいと思います。

2011年度 神学生交流会 第1回

「『いのちとは何か』を考える」

2011年5月14日 (土) 12:00～17:30

講師：土井 健司(関西学院大学神学部教授)

脳死とは何か、世界共通の「脳死判定基準」が出来ていないままで、臓器移植のために「脳死」ということが過剰に取り上げられ、脳死の人の生命を考えるこ

とがおろそかになっているのではないかと指摘が土井健司氏からなされた。例えば、中村あけみ氏は娘ゆりさんを1年9か月脳死判定を受けた後で介護したと

いう例がある。その人がいつ死んだとするのか、慎重に考えてみなければならない。脳死と判定されても、爪は伸び、髪の毛は伸びて、肌は温かく、死んだという実感は伴わない。しかし、脳死という判定が下されると、他の人の命を救うために臓器の提供をしていただけないかと求められる。愛するものを失った上に、「自分は何をすべきか」という葛藤に押しやられることは二重の苦しみを掛け交わりの時ともなった。深く感謝してご報告いたします。

岩波ブックレット「いのちの選択」¥600の推薦があった。

35分間のオリエンテーションであった



が、ホアン・マシア氏の話のオリエンテーションになり、神学をする学生には貴重な考える機会となった。

今回の企画は職員の中井博義さん、厨房の職員さんの協力がなければ成立しなかった。ホアン・マシアさんも土井健司

先生も一緒に食事をしてくださり、楽しい交わりの時ともなった。深く感謝してご報告いたします。

(春名 康範)

2011年度 修学院フォーラム「いのちを考える」 第1回

「生命哲学とキリスト教」

2011年5月14日 (土) 13:30～17:30

講師：ホアン・マシア (イエズス会士、文教大学客員講師)

世の中には急いで答えを求める傾向があるが、「いのち」の問題はじっくり粘り強く考える必要がある。2011年度のプログラムはそのような意図から構成するが、第一回目は、生命倫理をさらに掘り下げて、生命哲学の必要を説いているホアン・マシア師におはなしをしていただいた。

マシア師は上智大学文学部で教えていた76年に、大学内に生命科学研究所が設立されたとき哲学者、神学者として関わった。この研究所は、まだ日本にバイオエシッ

スが成立していない時期、文系と理系の学問の相互交流をもとにバイオエシックスの導入と形成を目指して設立したものであった。マシア師は設立当初からメンバーとしてこの研究所に関わり、バイオエシックスの著作・論文を次々に発表していった。日本におけるバイオエシックスを牽引してきた研究者の一人である。



マシア師のおはなしは、スペインの哲学者ペトロ・ライン・エントラゴと日本の湯浅康雄の心身論をもとに、いのちを考える際に身体と心を分けてはいけないというこ



とを基本にした。この点精神性を過度に強調する神学者と機械的に生命を扱う科学者の双方に反対しつつ、心身一元論についてさまざまな例を用いながら説明して下さった。最初と最後に、創世記2章5節から6節をもとに「いのち」が与えられたものであること（贈与性）、同書4章10節、マタイ伝13章24節から30節をもとに「いのち」が壊れやすいものであること、またマルコ伝4章26節から29節から「いのち」が預かり物であってそれを実らせる必要があることをおはなしになった。

「いのち」とは何かを積年の研究と経験、思索をもとにわかり易くお話下さったものと思う。討議の時間には、お話の内容を確認するものよりも、発展的な質問が多く発せられた。たとえば過剰医療や安楽死・尊厳死、アメリカにおける臓器提供について、さらには大震災について、多様なことを話し合った。心身合一論という点を軸にしつつ、まだまだ答えには至らないものの、「いのち」について広く、深く考える時間を過ごすことができた。

（土井 健司 関西学院大学神学部教授）

《参加者アンケートから》

- ・一人の人間として生きて、死んでいく事の幸せ感を大切にしたい。
- ・神学・哲学を科学・医学に接近させて考える良い機会になりました。
- ・臓器移植について、より深く考え学びたいと思いました。
- ・先生のお人柄、長く深い経験から、たくさんのおいしさを頂きました。
- ・生命を賜物として受け止める人間が、こわす事とする人間の存在の限界。
- ・心身合一論的に命を捉えるというのは、非常に面白かったです。

2011年度 修学院フォーラム「人と教育」 第1回

「本当のことは「ひとり」から始まる」

2011年5月28日（土） 13:30～17:30 談話会19:00～21:00

講師：安積 力也（基督教独立学園高等学校校長）

安積先生の講演は、今生きる若者と、それを見守り育てようとする大人にとって、大きく欠落している部分をえぐり出して見せてくれる内容があった。

大学時代、科学的真理に基づいてすべてを考えてきたことが崩れ去り、一から出直す気持ちで高校の教師になった。教師生活をして40年を通して、認めざるを得ないことが2つあることに気づかされている。

①「本当のことは」、後にならないと分らない。



②「教えることのできないもの」



の」がある。科学的真理と人格的真理の違いである。

今の子どもたちは、暗闇

を教えられていない。  
・「自分の闇」を直視できない親や教師は、「わが子の闇」「生徒の闇」を聴けない。その子どもたちはさらに深い闇におかれています。

そこで、やっと見えてきたことは、  
1、「待つことによってしか育たないもの」がある。  
2、子どもは「された」ように「する」よ

うになる。

3、本当のことは「ひとり」から始まる。

ということである。子どもは、一人の例外もなく、「地中深く宿された種」を宿して生まれてくる。結果を強制する教育から、深い原因を与えていく教育へと変えられることが望まれる。「光は、暗闇の中で輝いている。」（ヨハネによる福音書1章5節）恐れは「閉じる力」・愛は「開く力」

夜の懇談会も時を忘れて熱い議論が交わされた。

（榎本 栄次 日本基督教団世光教会牧師）



《参加者アンケートから》

- ・先生のお話を聴いていて、自分の子育てや、その中での困っていることが、そのままいいと思えた。
- ・私たちがきれいごとではなく、正直に語り合えたことがよかった。
- ・生きてきた人生をふりかえった時から、前に進めることを教えられました。“ひとり”で神にむきあうことの出来る時を与えられていることに感謝します。
- ・世代間伝達の問題は、これからも考えていく重要なことと改めて思いました。
- ・謙虚に信じて待つ、このことを大切にしてく、大切さを感じています。
- ・教育の根本問題を深く聞くことができました。

2011年度 主催・共催プログラム 秋からの予定

- お茶のこころと宗教のこころ 第2回10月17日(月)、第3回2012年2月13日(月)
- 修学院フォーラム「福祉とこころ」第1回11月26日(土)、第2回2012年2月18日(土)
- 修学院フォーラム「いのちを考える」第3回11月5日(土)、第4回12月17日(土)
- 修学院フォーラム「人と教育」第2回9月17日(土)、第3回11月11日(土)
- 開発教育セミナー 第4回9月17日(土)～18日(日)、第5回10月29日(土)～30日(日) 第6回12月10日(土)～11日(日)
- 神学生交流会 第2回10月8日(土)
- もみじまつり 11月23日(水・祝)
- 認知症プログラム 2012年1月28日(土)

3月11日東日本大震災の被災者の皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。

被災地の復興にはもちろんのこと、原発事故の影響の広さ、収拾の難しさに目をそらさずにいたいものです。改めて日常生活を守ることのかけがえのなさを心に刻みたいと思います。節電や、新エネルギーの開発に多くの知恵が集まりますように。当センターの活動にも一層のご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（編集子）

発行人：小久保 正（関西セミナーハウス活動センター運営委員長）

発行所：（財）日本クリスチャン・アカデミー 関西セミナーハウス活動センター

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23 電話:075-711-2115 FAX:075-701-5256

E-メール: office@academy-kansai.org ウェブページ: http://www.academy-kansai.org/